

子載和歌集

上



やほやんくしやいかららやあはれ代りわし  
しきりくあしう紫のたふれふ文ふひら  
はまらましきあひれ部あしき延喜れ  
津代り古今集はえりて天馬りあし  
あはれあしき後撰集とあはれ免経ひ白川の  
あ代り後拾遺は勅と免経河の先帝の  
あはれあしきとあきまつ免経あはれ  
あはれあしきとあきまつ免経あはれ  
あはれあしきとあきまつ免経あはれ  
あはれあしきとあきまつ免経あはれ  
あはれあしきとあきまつ免経あはれ

きくじつひさしりあまればはせよされせ  
 され我國はまゐるきつるくきりんを  
 へららるところ年ばはらぬうららる  
 智徳太子のひこころあはひら法のへ待たぬ  
 ちゆは我事より拙のし修どののこぢり  
 くをくのみにくところららへはとして結し  
 うらやあへへ集はらへいたまふあま  
 けるはまればるきあまきま

我君世故あるはくまのりはけく先  
 たまふとふはきり年ばるきりたふ

ありんあとしはじりるは庭玉うてふ  
 ふとせひりるるふみさあともひこそお  
 ふあひひしりあはしの志のちなるすこ  
 きはあまのたまきり水うらりせよとせ  
 つさうひとひめさつあきまふかまじ  
 彼やあひせくみちらあまのひみうたれ  
 長秋はあはむるあまのまのまのほり  
 はりは秋はあはむるあまのまのまのほり  
 うらひあひしりらに霞あはあまのまのほり  
 らのあはれつふはつあまのまのまのほり

くひもてしとみし折よるそとてしひのく  
しとくふぬ情ありしとみれば花あめと多林の  
月去りし包がしとみへん後うこつとみ  
し事ありし時とみしと竹の影  
あつてはさこのあまのたかやまともろ  
のりりすしとみはとわらふとみたしは  
ららとみさしとみしとみとみとみといふ  
しとみとみとみとみとみとみとみとみ  
者しとみとみとみとみとみとみとみとみ  
このしとみとみとみとみとみとみとみとみ

じしとみとみとみとみとみとみとみとみ  
んそとみとみとみとみとみとみとみとみ  
えしとみとみとみとみとみとみとみとみ  
いしとみとみとみとみとみとみとみとみ  
しとみとみとみとみとみとみとみとみ  
かそとみとみとみとみとみとみとみとみ  
物とみとみとみとみとみとみとみとみ  
たしとみとみとみとみとみとみとみとみ  
ひしとみとみとみとみとみとみとみとみ  
きしとみとみとみとみとみとみとみとみ





— 遙きとんばよまきこゆとつたなほに色  
多てまつわくかみとらよまじあまあよ  
ゑれあそくろふとの紫浦くおひが  
草のわさわの光多てまつつてさ見えく  
のわとらまをぬりもわらあ— ば集  
のくこぬこひ志り— とれぬまははは  
乃雲中風ひさ— をほさりの武津島  
君かうもわく志つるあ— ああこれ  
ま枯とれくわ世くれり— 霜とくと  
祢さ— 光や文活みはる年ぬわら。

月の中をばくまえ— ひ多くまつる  
わ— かんああま。

千載和歌集卷之第一

春舟上

まゝあらしの多し日く見ゆきり

源俊賴物言

まゝあらしの多し日く見ゆきり

源俊賴物言

中納言酒信

みじ山あらしの多し日く見ゆきり

源俊賴物言

侍従門院経河



鳥つらに岩のよきくらに流るる鳥井里は流る  
堀川院中時百前入寺もあつた時海鳥  
とよめ家 前中納言道房

道あるといふ物成山里小治平といふは長治  
承暦貳年内裏後春の寺合  
寫とよめ家 藤原朝臣朝下

とよめ家のいふ水打とよめとよめいふとよめ  
後冷泉院中時百前入寺合  
とよめ家 大納言隆國

山里の植杉よめとよめとよめいふは鳥の

法住寺入道前おゆとよめいふとよめ  
内大臣とよめとよめ時十前の寺とよめ  
とよめとよめ 源後頼朝信

煙の室のやとよめとよめいふは鳥の  
右大臣とよめとよめ時家小寺合とよめ  
とよめとよめとよめとよめいふとよめ

物政前右大臣

鳥つらとよめいふとよめとよめいふとよめ  
堀川院中時百前入寺のうらとよめとよめ  
とよめ 前中納言道房

わらわの子の神つら山とまをさそと殿の衣立も紅  
葉の舟の中とくしりか

右部少輔

まくら松のあつしも月をさそとそらとこの  
山

左衛門督

見渡すははらとあつし松はまをさそとやらの  
山

百首の舟の中とくしりか

侍賢院堀川

とんたの松のやまとまをさそとそらとこの  
山

安小約の女房の舟の中とくしりか

右の女房の舟の中とくしりか

右部郷通俊

うし山をさそとあつし松はまをさそとやらの  
山

堀川院の舟の中とくしりか

とんたの松のやまとまをさそとそらとこの

右部少輔

春月の舟の中とくしりか

し月の舟の中とくしりか

とんたの松のやまとまをさそとそらとこの

権中納言俊忠

咲くしる梅の立寄るよ海客の心ゆく教とて今と社へ

返

源一よお物下

梅のえんをいかにいかにとてあやふく今と社へ

梅の木よ寄る海客よ海客の心ゆく

よめ

大京大まの御捕

梅のえんをいかにいかにとてあやふく今と社へ

永保二年二月后の言わく梅花之薫と

ちりて散るる見ゆ守れ

久我前大政大まの御捕

ちりて散るる見ゆ守れ

源一院の御時百首の言わく梅花

花の言わく守れ

大酒玄仲頼

今よわの梅咲看ん心よ寄る海客の心ゆく

前中酒玄仲房

梅の花折るる言わく梅の花折るる言わく

崇徳院よ百首の言わく梅花の言わく

ゆめ

大炊出門右大まの御捕

梅の花折るる言わく梅の花折るる言わく

梅の花折るる言わく梅の花折るる言わく

梅く小枝赤きつまばのやそはあけのけ

右原道信物片

うよ更く風吹かんと花の白く比のやそはあ

里古原文太夫後成

まの枝の梅くは月の光を照らす花はれ

百首の奇しく分る所梅の弁とてとほせ

梅くは

崇徳院御製

まの枝の梅くは月の光を照らす花はれ

梅花を薫るとつづらんをよめる

源俊頼物片

梅くはの枝のやそはあけのけ

梅くはの枝のやそはあけのけ

梅くはの枝のやそはあけのけ

二品は親王守寛

梅くはの枝のやそはあけのけ

指大納言實成

梅くはの枝のやそはあけのけ

甲院小あけのやそはあけのけ

うんるともやそはあけのけ

花咲きもはれ枝よはれつとく曾古名

又かま後成のりふはりりゆら

大納言定春

昔くわあふみ君あふみ花あふみ心くふふふん

堀川院の御時百首の奇事あふみ時去ぬ

のふはりあふみ 前中納言定春

くわあふみあふみあふみあふみあふみあふみあふみ

後原其後

去ぬあふみあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみあふみあふみあふみあふみあふみあふみ

堀川院の御時百首は奇事あふみ早蕨を

あふみあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみのあふみあふみあふみあふみあふみ

景徳院の御時百首の奇事あふみ時去ぬ

あふみあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみのあふみあふみあふみあふみあふみ

堀川院の御時百首の奇事あふみ時去ぬ

あふみあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみのあふみあふみあふみあふみあふみ

あふみのあふみあふみあふみあふみあふみ

大進中納言

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

後三位頼政

天降の御ありの御事候事と申し候ふは

祝部右兵衛

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

宗徳院より御上の御事候事と申し候ふは

宗徳院より御上の御事候事と申し候ふは

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

宗徳院御製

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

侍従門院堀河

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

白川院より御上の御事候事と申し候ふは

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

京極前より御上の御事候事と申し候ふは

山橋の御ありの御事候事と申し候ふは

鳥羽院より御上の御事候事と申し候ふは

御上の御ありの御事候事と申し候ふは

花園左大臣

新きうら花の積と名あり長閑よとりの白川の水

蓮大寺左大臣

萬世の光ありや多かるん昔まの秋風もなれ

近衛殿よ渡らけ給はくゆへに也給ふる日

ときよ山花とさるんをよも守給ふる心

崇徳院御製

あつた花のわづらよ成りたる白ふも春山風

法住寺入道前大臣

ゆらぎ返いとめ復入道まはのこもかたの思はま

寛治八年三月八日ありてはかきいす比君の

高陽院の家養弁合ふ小梅の弁とて

中細言女

山梅白ふわづらも雲霧の風なほよあらし福に

藤原朝臣

花梅よめくらぬ山をさるあまの心も風霧あらし福に

東梅の家よく十種供養し時きり時

白河院出家也さる給ふく又の目弁也

と給ふく給ふく

東梅前住の比君

桜花のくさくさ小逢ねまじりてあつたふとたみし

後二条園白内大臣

花盛まよひまよひ月渡せりてあつたふとたみし

右衛門督基忠

咲匂花のわづらひまよひ月渡せりてあつたふとたみし

毎朝見花といふらん

中院右大臣

初来くもれ桜のわづらひまよひ月渡せりてあつたふとたみし

東山よ花見侍りてあつたふとたみし

太夫大臣

かみあつたふとたみし月渡せりてあつたふとたみし

十箇の奇人あつたふとたみし

前左衛門督公光

今更の心よとしりてあつたふとたみし

景徳院よ百箇の奇人あつたふとたみし

大東大ま歌捕

うつらふやそ後の山の桜花を井ぬる

前系議教長

山桜花のくさくさあつたふとたみし

後原清輝相信



神領の三宮山にまきつくを祝ふ者梅あけく賀  
平見山花といつらん

仁和寺後道法親王

淡衣衣の白いとさしあつらんや冬小娘糸つらん

鳥原山花といつらん

行政前右大臣

咲ぬやまぬ山花よ鳥入家よは花の志とる成る

鳥花日書といつらん

源俊賴朝臣

常としてぬくさつれく山梅さくあふまきつくはま

花の奇さく強り 道周法師

信后 教頼

花散小志ぬ山花のまきは梅さよまらん

賀茂の社名奇合とくくく 須持きり

時花老の奇とくくく

友原公時朝臣

年とく同梅の花の色と保すん梅の心と物り

友原公徳朝臣

花盛日あふ山一ふあふれくまの心あふれく

去日入社の奇合とくくく 讀持り

よあつらん 朝照法師

吉北川人... 増し... 根... 花...

古御花といつら心と... 結多

く見人

平忠度相伝弁也

さく波や志願の都... 花...

日吉の社の弁合... 候傳多時

祝部若林成伴

さく波や志願の花園... 候小者人の心...

花の弁... 候 賀茂成保

高砂の尾上の楼... 候... 候

園位法師

な... 候... 花... 候... 山... 候...

右原為兼 法名 祥念

吉野山花の盤... 候... 山... 候...

無... 花... 候... 候...

源仲正

春... 候... 山... 候... 花... 候...

西... 候... 候... 候... 候...

白... 候... 候... 候... 候...

上西門院玄衛

花... 候... 候... 候... 候...

弁合一侍多時花の奇としてあり

大宰大貳重家

とく同の秋の道と見渡せば雲小波り谷相見え

友原範繩

と波やふらふ山の峯のき見をよやふ花の道と

十首の奇しく小波とささゆり多時

花の奇として淡ゆり

皇太后宮大夫俊成

山吉野の秋の道と見渡せば雲小波り谷相見え

千載和歌集巻第二

五言下

鳥羽殿小波り一はく多時花見花

といふ心と名のこころつらつら

はわくよしとせ給り多

白川院御製

嘆くもあなまをそとれ木乃木よ花は日敷も積り

みらふ花は一はく多時鳥羽殿小波り

たぎつら多時池上花といふんとし

給り多

院御製

池水小川の桜敷一帯は浪の荒れを感ずゆれ  
山の花も心ゆく見ゆ

大宮前太政大臣

白雲と峯の間にて桜花散りしやうと高き山

白雲と峯の間にて桜花散りしやうと高き山

芳野山花の影に似ぬ花もあはれくはる峯は白雲

寛治八年三月の事とてこれはいまの地君

の高院の家も奇令に櫻と流る

内侍周防

山櫻よ心ゆく流るる木は本よ流るるらん

後朱雀院の御時うへのよの二天ひんり

山の花見ゆるよあはれ一帯神の

白川原よとゆわくよのく一帯流る

るるにゆきゆき 大納言長家

去あふぬ花れはきくしをわぬはら社とれ

落花漫山路といつらつと流る

赤深赤門 上東門院

端しむすては程し方は心ゆく山櫻も

浜川院の御時西首も奇令あきりし

さくさくと流る 前中納言通房

山梅のよみ心くさくさな花をいふもな

友原仲実朝臣

花の散る木の下陰のつらきものを梅の花に似て

友原のよみ

まよひて梅の花散るもや奥山の風を梅の花に似て

崇徳院の御時十又首の弁身をわきまの御

花の散る弁身をわきまの御

右大臣清経公の

梅のよみ心くさくさな梅の花をいふもな

百首の弁身をわきまの御

前系議親隆

春風よまよひ山越花をいふもな

花の散る弁身をわきまの御

大進中将良経

梅のよみ心くさくさな梅の花をいふもな

花の散る弁身をわきまの御

右進大将実成

梅のよみ心くさくさな梅の花をいふもな

梅のよみ心くさくさな梅の花をいふもな

梅のよみ心くさくさな梅の花をいふもな

久我内大臣の家少くも少くも花情を

いづる心と情を 権中納言通親

櫻枝の影も少くも少くも花情を

花の影も少くも少くも 俊惠法師

山崎の山下風や拂らじ猶も花情を

恒有僧

一枝の折ぐゆらん山梅風よのまやらじ

道周法師

花の影も少くも少くも花情を

覚感法師

あななくも少くも少くも花情を

源仲徳

山梅の影も少くも少くも花情を

花の影も少くも少くも

道命法師

よも少くも少くも少くも花情を

池小橋の影も少くも少くも 能因法師

櫻枝の影も少くも少くも花情を

花情の影も少くも少くも

花園大僧

山風花のし花をいふくまへ一谷の下  
山花落花といふんをいふ

前大納言信實

花のれ敷てふ花を山里拂ひぬを分るる花  
花落客拂といふんをいふ

友原とていふ

故のれとていふ花をいふ花をいふ  
花のらりわすれをいふ  
花のらりわすれをいふ

源義家朝臣

吹風花をいふ花をいふ花をいふ  
とく日じら山をいふ花をいふ  
日僧部院親坊をいふ花をいふ  
あるよ花をいふ

源仲正

去るころ水堂の山の邊橋出たつらるる花  
百首の奇をいふ花をいふ

前泰議親隆

積山ひわつた花をいふ花をいふ  
昔原孝通朝臣

今原孝通朝臣

堀川院の御時入百首の内より多きを

よめり  
前中納言進房

おかしらえしや歳ごころよき志はこぼれぬ  
おかしらえしや歳ごころよき志はこぼれぬ

中納言四信

おしほく摘てゆん莖咲よの志のよきあま

修理大夫那家

まこい鳴りておのけは莖志めさすけりあ

嘉永二年名入文光哥今よ莖志めり

源四郎下

道をこ入神の系つる莖まの形見よつてゆん

堀川院の御時入百首の内より多きを

前中納言進房

まあつ井より川水野をとりてくはるん

後原

歎きつれ嘆よむむむむむむむむむむ

堀川院の御時入百首の内より多きを

あしよきしよし一見しむれをむりてはひ

二条大進大信文肥後

九重よ八重山吹とつて井年むむむむむむ



水色を鏡花といふんやあり

友原龍徳

去非川原の山吹咲ゆまの庭を源と云ふ

友原定経

いふ水色こそとめる山吹の家の下に井を掘り水

飲みとあり 惟宗廣言

いふ水色こそとめる山吹の家の下に井を掘り水

百首の奇事あり山吹の奇事あり

とあり

友原清輔の信

鏡花を鏡のままにさし給ふと梅よりよき花なり

土御門右大臣の家——奇合——多時

友の花とあり 康資王母

いふ水色こそとめる山吹の家の下に井を掘り水

永弟六年の裏の奇合——友の花を

いと伝あり 中納言祐康

九重よきけりといふ友の花を鏡花と云ふ

百首の奇事あり山吹の奇事あり

大炊御門右大臣

年々花をいふ水色こそとめる山吹の家の下に井を掘り水

源平のついであり山吹の奇事あり

行幸ありて久き御二日とらひて  
うへうのいふことしつらありて  
小讀ありて久き 二葉院御製

成り又まゝの御書はわが御書と  
百首の御書ありて久き御書と  
久き御書ありて久き 景徳院御製

花鳥の御書ありて久き御書と  
御書ありて久き 御書ありて久き

中務の具平人

余は久き御書ありて久き御書ありて久き

式子内親王

御書ありて久き御書ありて久き  
百首の御書ありて久き御書ありて久き  
御書ありて久き 大納言隆孝

御書ありて久き御書ありて久き  
三月盡りて久き御書ありて久き

久我内大臣

御書ありて久き御書ありて久き  
御書ありて久き 友原定成

御書ありて久き御書ありて久き  
御書ありて久き御書ありて久き

源仲德

力命こと秘人し秘志し秘と云別を歌のこゝろ  
及原仲家朝臣

あつとまぬ秘の志し秘秘行じ心の秘はまほ  
行跡三月盡しつる心とよあり

琳賢法師

諸氏よはかり秘の秘しつるおとせと云小別めつて  
三月盡る日星太右大臣太史俊成のり  
よしと見くつるつらき

比下福賢

花のよはかり秘の志し秘秘行じ心の秘はまほ

国三月盡しつる心とよあり

権大僧部 範玄

秘の志し秘の志し秘の志し秘の志し秘の志し  
海路三月盡しつる心とよあり

前大僧正 光忠

よめ共のよはかり秘の志し秘の志し秘の志し

延川院の山時百首の可なりつる心とよあり

まの書と流る 前中納言 道房

書よめ共のよはかり秘の志し秘の志し秘の志し

前集文河内

ふまの歌の歌...  
何れを

千載和歌集巻第三

夏舟

海門院の雨時百首の舟と舟の雨更衣  
 のとらとらとらとらとら

前中細言通席

夏衣の衣よぬとくまの衣見もさみさみ  
 友原基俊

ふまの歌の歌...  
何れを

山宗徳院の百首の舟と舟の雨更衣  
何れを

友原基俊  
 後思貞清朝信

わくわく別よいあ他の人や卯月とていふ先ん

卯辰を換ふ 大東大寺殿補

村く小嘆子垣杯の卯辰の未の申の辰の辰の辰

善見卯辰の心とていふ侍る

右近大納言方

有よりのく新卯辰の辰の垣の辰の辰の辰

卯辰の奇とていふ侍る

仁和寺後入道法親王

玉川と書小安の卯辰と書辰の辰の辰の辰

白川院馬羽殿の辰の辰の辰の辰の辰

奇令侍る卯辰をいふ

右近大納言方

辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰

吉村卯辰といふ辰の辰の辰

加茂政平

卯辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰

卯辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰

右近大納言方

卯辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰

山里の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰の辰

神皇とあり 友原とあり

やまのふもとを流る葛原とすけりあり

堀川院の山内百首の奇事あり  
よめり 友原とあり

あつちの山内百首の奇事あり

頻りにいひつゝあり

此の目録とあり

前東院式子内親王

神山の蘇とあり

仁和寺の女とあり

しつとあり

梅原俊公通

時多侍ひとあり

候理とあり

友原道徳

二書とあり

介とあり

頻りに守保

時多志とあり

山寺とあり

多岐よめり

道命法師

あゝ此侍命の御部をぬふるは御神

也ーしらに

康資王母

祓免とらたよあは安の時をつゝ及人ま侍るは

刑口の頼捕母

時多まこひも時多まこひも時多まこひも

免感法師

まこひて聞よまこひて聞よまこひて聞よ

崇徳院よ百首の可なりまなり

前系議教長

為しとまこひしとまこひしとまこひし

香園時多まこひ

後大綱言實家

思ひもつゝ思ひもつゝ思ひもつゝ思ひもつゝ

言天時多まこひしとまこひしとまこひし

仁和寺は親王も

時多まこひつゝ時多まこひつゝ時多まこひつゝ

かゝるまこひつゝかゝるまこひつゝ

友原清輔朝下

あゝ此侍命の御部をぬふるは御神

從三位賴政

一、新いふやふとて、時島を治し、つらふ小をささるるに  
右大臣信よ、侍多し、時家よ、百首入、守、後也  
侍多し、つらふ時多し、守とて、つらふ侍多し

撰政前右大臣

思ふに、つらふ侍多し、つらふ時多し、侍多し、つらふ侍多し  
曉、團、時多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し

右大臣

時島、侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し  
時多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し

権大細言美國

名、侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し  
権大細言、宗家

前左衛門督公光

時島、侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し  
撰政、右大臣、侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し  
侍多し、つらふ侍多し

皇太后后文太后後成

つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し  
右大臣、侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し、つらふ侍多し



乃奇續也傳多よ請り

道用法師

和とひは孫夜ぬよ外よ時高のいふ傳く、一都の聞

所高と後傳多り 指印細言古方

心とていしてつる所高がぬくよ、いふ村友覺

久我内大臣の家少く、後高葛蒲といふ

らん心とよあり 前中細言雅撰

都へいさふつるもあやめ弟あひ孫の床の枕

葛蒲の奇とてよと傳多り

坊政前右大臣

八月ぬよの世いひじあやめ弟あひ孫の床の枕

日大臣良通

形をくまふよとまきぬ時高孫もあやめよとて伝

後來雀院の西町長久二年八月一日内親

王の奇合よ花橋とよあり

皇太后夫人の又言

そとあはぬ花橋の白ひびよとて系神傳とふ多し

毛 一ら次 友原のこゝ

風よあはぬ橋よ神とて我傳よとて系神とてん

友原家基

信濃の国より百の村あり追風をくさす

たて年親宗

我君の花櫓より吹風をきく里より

花櫓薫杭といつらんとよめる

藤原公衡の信

折しよあま花櫓のむらふ昔と見ゆる夢れ杭も

百首の奇兒より多時花櫓君の奇とて

讀と信り多し 景徳院御製

八月の月花櫓のむら月と見ゆる夢れ杭も

見しよ一は 壬辰親王補仁

八月の月花櫓のむら月と見ゆる夢れ杭も

藤川院の内時百首の奇兒の奇とて

ぬり奇とて信り 藤原の信

いよき縁の宿れよきは御花とて八月の月

源俊賴の信

八月の月花櫓のむら月と見ゆる夢れ杭も

中院入道たて年中の信り多時奇合

信り多し 五月の月花櫓の奇とて

藤原朝仲の信

八月の月花櫓のむら月と見ゆる夢れ杭も

宗徳院より百首の可なりけり時よあり

左京大夫右補

八月五日牧へおまじいよとて候金ふりしけりや

前参議親隆

さしづめ水ぬかきやほりし人をぬきしりし

曾た居文大夫後成

八月五日焼く煙ふたふりしけりし

右近衛右補右兵衛

時よあり水ぬかきよあり

侍賢門院安徳

八月五日警けりし木朽より浦へ煙あつて候

右大臣右大臣は侍多し時百首の可なり

きりしりし八月五日のふりし

源行頼右兵衛

八月五日室のやほりし煙の波のよあり

張伯八月五日のふりし

源仲正

さしづめ水ぬかきよありし

月前部よりつるふりし

貞茂成保

大月女史の遺言より山時鳥の事あり

大月郭公の遺言より山時鳥の事あり

按察使資賢

山時鳥の事あり

山時郭公の遺言より山時鳥の事あり

中細言師時

逢坂の山時鳥の事あり

後一葉の山時鳥の事あり

侍の事あり

よめり  
律師の事あり

おとこつと独りえくは鳴りし山時鳥の事あり

膳面と人言居寺の事あり

とちりんを讀ゆり

源俊賴の事あり

ふとての思ひ物なり

堀川院の事あり

とちりんを讀ゆり

中細言師時

大月女史の遺言より山時鳥の事あり

山時鳥の事あり

心と後付多

前中細云迄届

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

修理大支取書

と申すは其の事なり少くも其の事なり

権中細云後中付物一付多付多命

付多付多照村の事としてよめる

友原歌徳物下

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

大庭卿行家

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

源仲止

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

讀入

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

安成平保

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

百首の事なり付多命として候なり

友原季通物下

よりと文讀の系下家は無きものなりとわたりて

一 巻 三 十 二 次

源俊賴朝臣

若くは志水と若くは甘泉とて外は夏と道はつる

那由法師

さゆらぎ光涼き夏のよけ月と志水とやと

泉色細涼とつる心とよめり

法眼法師

口伝の山下水よ今くはとてとてとてのき

夏秋曉月とつる心とよめり

若原家朝臣

我が心も秋のや情は心は山のよとよの月

夏月とよめり

祝部若孫成伴

夏のよけ月と光とつる心とよめり

白萩月明とつる心とよめり

俊直法師

夕立の雨と晴とつる心とよめり

大文の前大臣大信の家とつる心とよめり

つる心とつる心とよめり

小萩原とつる心とつる心とよめり

菊花先秋とつる心とよめり

那由法師

友衣とてお原と合ひおつたへるに林と松とあり  
松風松をとりつらんといふ

友原親盛

林風と浪と共よ越わらんといふに松の松山  
刑部曰お捕す可合し竹多し細涼の  
心と演竹多し

前泰義教長

若あつた水のこもはる友小とて松原山と  
友原感方物ト

志月とわあつた松の白葉とて見ると涼  
百首の詩をとりつらんといふに松と

いふ

友原季道物ト

いふとわあつた松の白葉とて見ると涼  
甲子辰文とて後

あつた松の白葉とて見ると涼  
いふとわあつた松の白葉とて見ると涼

いふとわあつた松の白葉とて見ると涼  
いふとわあつた松の白葉とて見ると涼

千載和歌集巻之四

秋奇丁上

秋之日くく待まら

侍従のめむと

秋立しやつらかよ我君の病の風の吹かるらん

二君は親王

あたらしの病きくあつ秋あつめあつや秋は

百首の奇事あつあつ秋立んとあつ

侍賢の流のやあつ

秋のやしの秋の下風よ立くよれあつは成る

皇太后のまは後成

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

初秋のふと待り 秋は侍師

秋のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

秋のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

秋のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

秋のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

秋のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ



大藏卿行宗

物よふ雲の影を照らすを先きあはじの藤の上風

紀橋の心と

源俊賴朝下

林風や泪のよやくしるはるはよとつまつり袖のほ

七夕の心は涙のよやくしる

攝政前右大臣

七夕の心の中やいぬらん侍の心をあはれをた

百首の可きあはるる時七夕の心とよめる

大納言隆季

七夕の心ははるる風は八十あつとよめる

堀河院の心時百首の可きあはるる時讀

ゆききり

二条大納言右大臣肥後

七夕の心ははるる衣をきてはるる風ははるる心

前京文河内

在倉葉三

恋こし合衣斗や七夕の心ははるる心

七夕の心と後り 源俊賴朝下

七夕の心の河原の石枕かきりも果はるる心

百首の可きあはるる時七夕の心と後り

きり

崇徳院御製

七夕の心をあはるる心ははるる心

七夕の後朝の夕儀より侍り

右御門右大臣

夫の川心とほく思ふことと神とわが道は曉る  
西河院の清時百有の可き事あり侍り

大納言師頼

秋の思ひ親の思ふやれ下り人か心か  
題一 所と 親王 秋田 装

とふの葉葉のふと吹風よ先きかむ神の  
雲居寺贖為上人命あく奇命一侍

きり時侍り

友原道輝

端高の船の廊や色ぬれん志き病よ刀を神ら  
葉花吉村といつらんをよめり

法印 朝賢

秋の風とあつ山里は秋の光りす秋の  
題一 所と 人 不知

かき秋の葉と波の秋風よあつ山里は秋の光りす  
和泉 武部

かき秋の葉と波の秋風よあつ山里は秋の光りす  
友原 伊家

秋山入聲とこしうい響いとこの秋の歌かきり

友原行家

文殊のく萩の男あふ素のん花咲くまの秋の歌

長谷法師

心よけ家集の色よ深き天袖も移るい萩の秋の歌

福川院の心時百首の弁年あふり何續

侍きり

大細言師頼

露の秋の東に女郎花一枝おし袖もわらぬ

法性寺入道前右政大臣の家く女郎

花は風といつらん心よとあり

前中細言兼色

女郎花かひくよ見まの秋風の吹くる末しるい萩

歌事侍きり時女郎花をらんくよ見

侍きり

前九條門督公光

女郎花泪も露も思ふまの折のい袖の外

色

友原行家

吹風よおまきあはまの女郎花離る花の枕成きり

権政前右大臣家少く弁年い侍きり時

花は秋をといつらん心よとあり

友原感方朝臣

名を知らずや、歳々小鳴のこす出の音とらふかつを  
行  
堀川院の西時百首の奇事や時より

源俊賴朝臣

さ満くふ心をとまらう文殊のたを色くまの如く

野花の姿をとりつら心とらあり

林の枝若ふとゆくと痛程しく野鳥こそなる拙者

百首の奇事や時和可としてあり

友原孝通朝臣

野が丁よりへのやうにたふる時いふるはあはれと思

曾右近大夫俊成

名を知らずや、林風をかきと鶴をくちあふ葉は里

題——らす

源俊賴朝臣

何となくと出まこととあはれ見の里林のたれ

百首の奇事や時和可としてあり

源俊賴朝臣

さ満くふ心をとまらう文殊のたを色くまの如く

野花の姿をとりつら心とらあり

二果親王

林の枝若ふとゆくと痛程しく野鳥こそなる拙者

題——らす

源俊賴朝臣

榮花を林の意深き乃の事此を山と云ふ處なり

景徳院より首の可き時より

侍賢門院堀川

しるごとく安んじよと云ふれは後よの事林の事

友原清輔の信

立田始ちうれ玉の信よと云ふれは後よの事

是 友原季経の信

乃常葉吹風の事彼の後よと云ふれは後よの事

園位法師

大方家共何の事なるは後よと云ふれは後よの事

法橋寺小僧信の事よと云ふれは後よの事

見とくよめり 道念法師

花蔭中林々の事なるは後よと云ふれは後よの事

久しと云ふ事なるは後よと云ふれは後よの事

前大僧云の信

時一と云ふ事なるは後よと云ふれは後よの事

住持の事なるは後よと云ふれは後よの事

きりよ前裁の事なるは後よと云ふれは後よの事

小舟

高きと云ふ事なるは後よと云ふれは後よの事

思辨花のつらふ心とよめる

友原伴家

今一と横よわぬん東路のいそがしめあつた

林の奇しやそ讀ゆきり

後政前右大臣

冬はよのあたらふ玉おぬ心くらくら風が音の

前大僧正是忠

いそはらち紫の山と林のいろとくは紅のしづ

月の奇あまそ讀ゆくら所とあり

持大納言久家

林の夜の心とつらば始しておれふとあつた月長く

月の奇し世首へほせゆきり時と見え侍

きり

持大僧正是忠

林の月と根の雲のあふとく晴れぬ雲のゆきり

堀川院の山時百首の奇とあり時と見え侍

源信賴の侍

木枯の雲と拂ふと根よとあふとくは月と雲のあ

後源信師

いそと月と柳とつらばいとあふとくは月と雲のあ

後政前右大臣久家と百首奇讀せゆきり

時月の奇としてよめる

友原隆信の巻

出ぬよりの月見よとほさるるなれとて松山は夕言の空  
月の奇としてよめる

前中納言頼頼

くほらささひのやよむの月とありの危あはれの氷はとく  
皇太后宮女史俊成十首の奇として  
きり中納言の巻 右大臣

月とれらるる思ふとて山と心の中あをほり  
権中納言俊忠の巻 水上月と

いつらんとてよめる

源俊頼の巻

あすこゝろし神湯の玉川新として父から彼よ月端の  
百首の奇の中は月夜奇としてよめる  
信ふきり 崇徳院御製

大炊侍門右大臣

こよあまの富士の根よとて月の輝けやうりあはる  
皇太后宮女史俊成

るけり水は白玉敷りて清洲川よとて今月新

友原信輔の信

去る後の浦津風よ芳晴く八十過ぎきとある月氣

法性寺入道前大政大臣内大臣よ約き

内月毎林友としつらふ心と讀む世約き

時よあり

源俊賴朝臣

思ひく懐くても辛れをわらふ物といふら世約よ

題しらす寸

友原のしらす

山かへははる人の懐けいふこと見ゆら月かぬ成り

友原道隆

秋の夜や夫の月をいふら覺月か光ぬははるら

法性寺入道前大政大臣の歌よ月の奇  
くふを約きる時よあり

大宰大貳守家

去るころの春の世縁は月清く水と見ゆら心は浪

百首の奇よ約きる内月か奇よと

よと約きる

右衛門督頼久

春よもあふと春よもあふらあはる月氣よの後の

海色は月をいふら心よあり

後惠法師

秋やも心の果をよわきるあはれ世よとあり月氣



賀茂社の後番の可令として往自守保  
年一續を約する所あり

持守納公長方

おと行渡りまゆとあふ今玉小あつら積り

若原公時物信

石月約より以高宗を月や終りぬ氷るらん

湖上月とりつらんと續り

若原歌家朝信

月氣清め氷と月まうう波するまれわつ

月前生とわつらんと續り

賴圓法師

照月の氣をえむに浅ら原島月下まをまら

月巡りあつらんと續り

若原親盛

浅ら原とまはつらぬれん先とよきと君の月

若原清輔朝信

史小きん我世の積を哀らむり月のみ色あわ

刑甲口頼輔

力なきの積を哀らむり月のみ色あわ

家式部

人方秋の衣と思ひやま月よ心あくれわくと

前大納言成通

そくしちつとて思秋の衣とわすてゆきあ  
は性寺入道前右政大臣の家とて洞庭  
月とつらんとてゆき

源後頼朝信

照月の環はの床やまの山は若川の水

千載和歌集巻之第五

秋寄下

題一ら可

大貳三位

遠のけ廣海くもけの秋の縁是れ公らわ  
坂川院の西雨百首の寄事わ守り  
よめり

後原仲実朝信

山里のさひわき木枯の吹夕くはく  
崇徳院よ百首春寄事わ守り  
よめり

後原季通朝信

秋の夜の松を拂ひぬ風さよと出るとの意と  
秋

は性寺入道前のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

内大臣よ侍多し時の家の命の時の風の

つらふとあり 友原時昌

藤原時昌のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

承暦貳年の内裏の命の時のあり

友原正家朝臣

夕なれどの新の吹風のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

堀川院の時の百首の命の時のあり

二葉太皇太后之肥後

見定山のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

大納言公文

そはゆの道のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

むらさきの補の仁の女のあり

秋の夜の同のむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

田上の山の里のあの麻の入の鳴のとのさのてのあり

源俊賴朝臣

むらさきの鳴の鳥のののむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

百首の命の時のあり

侍賢の院のあり

むらさきのむらさきのむらさきのむらさきのむらさき

夜泊麻しとんといふあり

刑部卿範通

今も同じき麻の麻は安ゆらわ生田のたのこといふ

友原澄信物言

ふと麻のふと麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

後志法師

若のふと麻のふと麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

道因法師

漆河の麻の麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

若の言もらふ家範

先延法師

文殊神の小麻の麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

麻の言もらふ家範

大原大寺備範

ふと麻の麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

大原大寺備範

安ゆらわ若の言もらふ家範

法中意園

山里の麻の麻は安ゆらわ若の言もらふ家範

後志法師

よふやふの身もや言ふはるの道といふより妻の建ふ  
道因法師

又言ふさうのや杖を担いでと麻の言さぬよきや  
頼茂政平

昔よわも杖の夕へと衣とい麻の言あくやとい初久  
惟宗廣言

さういふと何よぬとんやう鳴深山の里の方入見  
長寛法師

ふやあをのりんさうやうれあ高あふのふの原は  
深連法師

題 一 一 一

松のふ言さうの杖を担いでと麻の言あくやとい初久  
深兼昌

我の杖を担いでと麻の言あくやとい初久  
深連法師

杖の言あくやとい初久と杖を担いでと麻の言あくやとい初久  
友原高宗朝信

杖の言あくやとい初久と杖を担いでと麻の言あくやとい初久  
虫部北一といふをいふ

たを甲の良師

と申す所は、この東に出入り高き夜一いふ中をさる  
百首の弁事ありて所より侍り

大炊内門の右大臣

来りて申す所は、よりの出入り高き小村の當りて夜を去り  
養のそく鳴りてと申す也侍りきり

花山院沙汰

林より成ふも、さる養持のれりて、よ小村さきこゝあり  
保連の侍りて、いと侍り百首の弁事ありて侍  
きり、侍出入り弁事として侍り

皇太后の右大臣俊成

さる所へ思ふと出入り高きよりの、さる所へ林の當り

道性信親王

出入り高き、さる所へ成りて、侍り、林の當り、月日の終り

式子内親王

弟と申す、林の末家ありて、いよ月社色ありて、終り

侍り、泉院の侍り、九月十三日、来り侍り

よ侍り侍り、大炊内門の右大臣

と申す所は、さる所へ終り、いと侍り、月日の終り

十三日、来り侍り

侍り

杖の影をいんとしてたてこしらへ一帯を多(多)く  
月前持衣といふこと

仁和寺入道法親王定性

さよふく徳の言を多あじむる月と見つや衣の足

法門院の山州百首の奇事ありす時

持衣 大納言公實

急つや妹のうらむ衣さめくも人のたふす時

源後頼朝

松尾の言をたねいふとき衣をむる玉川の里

右原

併くあふいふくして唐衣を披やらしむ時

振袖持衣といふこと

後醍醐

衣の言を安あそきしれあは里をぬる持衣

音の奇事

法橋宗圓

夕陽や秋の衣とあつて分入袖小露のなを風

言の持衣といふこと

崇徳院法親

杖の影たりし時蘭の影は名の心地社と社

百首の奇なるものあり

前系議親隆

いかに岩よりなるものあり  
法性寺入道前太政大臣内大臣より  
衆の奇なるものあり

友原季通

今朝見れば  
月照華光と  
いふものあり

内大臣

白菊家より  
白菊家より

白菊家より

前大臣信止行卷

白菊家より

白菊家より

白菊家より

白菊家より

白菊家より

白菊家より

白菊家より

白菊家より



ふしとくは出づるわがし——と林公と栢と伝紀

暖西上人雲居寺より法海院の伝書

年合——侍守より小井周庵公と傳り

友原のし——

林よりのふしとく高野色抄のわがし——免の風流

紅葉の心と傳りきり

仁和寺は入道は親王免也

初時ぬらむ後もぬらむとていふ所のふしとく——付ふらむ

免是法師——

村雲のくは深なる家く——すくくは色くはんぬれ

林の寺とて傳り 友原定家

伊賀の田方精の色よわし初は夕へくつらむ物あり

題——らす 通命法師——

松崎の色のやふ思ふんく——山と照とる家く

寺法の前を改大信お家見侍きりよ

しあつ 小舟

君見してんやまらむし立田嶋の家は瑞雲とて伝あり

お家見侍きりしつらふとてあつ

素直法師——

板のよきふらむお家見侍らむあんなはとてあつ

奇命一得々々時ある系ノ奇として流る

九東去史野補

上階より下階に下りて上らるる系といはれん

月照ある系と云ふ心とをのこせつゝまは

りしころ時流口流りしころ

院流製

ある系と云ふ光と云ふ系と云ふもやあらは流るらん

嘉慶二年は任寺殿ノ殿上ノ奇命

同流流系といつらん心と云ふ侍多

右の流系といふ地者

山流は浦つとていふ系といふとていふ山ノ同者

大納言と云

清見方同は海でいふ流の系といふ系

権中納言と云

和系と云ふ系といふ系といふ系といふ系

た大弁親宗

和系といふ系といふ系といふ系といふ系

後三位親政

和系といふ系といふ系といふ系といふ系

湖上流系といつらん心と云ふ

刑部口籠書

と波やひれを根の山麓よお茶と海のおもひ  
百首の可申多時あり

友原信輔の信

三田山雲れ材をりつてつて海を緑る海

題不知

友感信師

林といひてはなりの植束時ぬももてはなをりぬ

金富院内時林の庭は茶といつてんを

よめり

友直公守朝信

庭の面よぬて積たつぬ茶といひてぬ  
ぬぬ

大井川よぬ茶といひてぬぬぬぬぬぬぬ

友直信師

多しぬ風山のぬ大井川のぬぬぬぬぬぬぬ

道周信師

大井川のぬぬてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

百首の可申多時あり

友原信輔朝信

今とらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

友原信師

三田山雲れ材をりつてつて海を緑る海

加茂成保

吹く風を原と見渡さるる風をわが家へ吹

松岡の松葉とわが心とよめり

後束の伴

久しぬ雲吹風の書かして我が村のお家やわが

故の山を葉とわが心とよめり

惟宗の信

故の山を木風よそくくぬ雲を縁めり

題 一 一 寸 法橋の舟

故の山を木風よそくくぬ雲を縁めり

塔門院の寺の時 百首の寺の時

よめり

源俊賴朝臣

林の田よお家よ多山里とよめり

百首の寺よすや侍多り時お家よ寺

とて後侍多り 攝政前右大臣

お家よお家よとよ色付の木風よ林の時

落葉浮水とわが心とよめり

後二条内大臣

言ては林を水やとよめりお家よとよ山川

百首の寺 一 一 寸 九月書入心と侍

結ぶ事

崇徳院清製

宗徳院清製の御書

山寺村書

前大僧正之忠

宗徳院清製の御書

雲居寺結縁経の後書

九月書

贈西上人

宗徳院清製の御書

源俊賴朝下

宗徳院清製の御書

兼房二年丙亥の御書

前中納言之書

宗徳院清製の御書

百首の御書

花巻大僧正之書

宗徳院清製の御書

結ぶ事

千載和歌集卷之第六

冬尋

海川院の御時百有九の年有る時初冬  
の心と候ゆきり 大納言公實

此日と初雪の言のまに岩間氷風寸氷らん  
源俊賴朝臣

いふ村の若衆と詠めまはしと木風は小風あり  
友原仲久朝臣

泉川氷のこわらぬつづき小若る氷るそはまら  
百有九の年一いつ時初冬は心と候と

冬尋

崇徳院御製

海川院の御時百有九の年有る時初冬

大炊沙門右大臣

とて氷と心との初といふ氷を冬れといふ

大納言澄家

とて氷と心との初といふ氷を冬れといふ

前冬議教長

秋の代り冬もや風も初冬といふ

秋の代り冬もや風も初冬といふ

秋の代り冬もや風も初冬といふ

山家初冬より

友原春吉

いんがくは雪の氷の氷るんこも風の音はるん

色——らん 和泉式部

外山吹風の色もきけいもなを真と志す

百首の可もきく時初冬は可もして

よもつきり 大炊時門右大臣

初霜や色くじらん曉の境の音もくははもるれ

堀河院の法門百首の可もきく時

よめり 前中細玄通房

も初冬と初霜の音もくははもるれ

友原春吉

初霜の色もくじらん曉の境の音もくははもるれ

色もつきり

友原春吉

冬まては初霜と雪の色もくははもるれ

色——らん 友原春吉

霜雪を枯しくも初霜の色もくははもるれ

馬内侍

初霜——初霜の音もくははもるれ





道周法師

嵐やびくぬる絲の縁まうしにわは道時多の種を月ふ

海川院の時百首の可きまらるる時の所

乃可 中納言國信

深き道時多のわづら敷くかたの命はまうしに

源俊賴の信

木の葉のよぬこさの時多の洞もてぬわしを絶

二葉大曾右后文肥後

うらなてくまらぬ里の時多計とるるてまら

赤位法師のよすしりて百首の可き

サセ侍多の時一くれ乃可とて

友原定家

時多のやれ敷の縁なやそ指合月の影の那

讀人

玉京小洞の敷を此て時多のやま屋のまら

山家時多のつらふん

源仲賴

嵐のえよ家のぬつてま言はくやれ敷のよ時多の

是 紀康宗

曉の縁えよるる時多のそりえてもく乃神の

落葉の心とよめる

友原感雅

あつてはなれ風とてかきかきとてかきかき  
中納言定頼世とてかきかきとてかきかき  
ろはつらうとてかきかき

中納言定頼母

都くふとてかきかきとてかきかき  
やほよまかきとてかきかき

中納言定頼

朝朝うらぬ川勢とてかきかき

海川院の山時百首の可きとてかきかき

海川の心とよめる 友原伴久頼下

かきかきとてかきかきとてかきかき  
陸源法師

海鳥よとてかきかきとてかきかき  
源俊賴朝臣

又とてかきかきとてかきかき  
傳大納言道徳家の人可きとてかきかき

かきかき 友原長久

妹の心とてかきかきとてかきかき

子馬と傍り

里大石文太史備成

深人の園と的の空よ鳴る鳥のこころ月をねん

アヒ

道因法師

若くは志候浪よ立ちる念ふにや浦つららん

右大臣

曉ふ成や志ぬん月影の清き川原よるる鳥こ

清中秘賢

霜うえてと秋ふらの浦きこゆやいやはるる鳥

貞茂成保

霜枯ふむの芳れぬくこの空よるる鳥こ

水鳥と傍り

源親房

か見えあやと毛の翁と拂うる鳥のこころ梅地は

鳥——ら寸

兼成祓

水鳥と水の上とやふよ見えん我も浮くる世と鳥こ

瑞川院の池の畔百首の奇をきく時

よめり

前中納言道房

水鳥と水の上とやふよ見えん我も浮くる世と鳥こ

百首の奇見えん時よるる鳥こ

崇徳院御製

こころのよれらるる鳥こ

た東あま歌浦

難波の入りとくろく多鴨の玉も氷床よまはひけり

水物清とりつら事と

持中細玄經房

と身ふき祿の床や煮わんつとわふらあふり

水鳥の可とそよめり

道因法師

鴨のから入りの多の煮わんつとわふらあふり

頼茂守保

道因法師の可とそよめり

月前水鳥とりつら事と

前大浦門替公光

道鴨の入りとくろく多鴨の玉も氷床よまはひけり

水鳥の可とそよめり

平多美守

和とくろく多鴨の玉も氷床よまはひけり

水鳥の可とそよめり

いとくろく多鴨の玉も氷床よまはひけり

後原成家朝臣

いとくろく多鴨の玉も氷床よまはひけり

道因法師

月乃としやふ日曇まふより梅わく水氷つは

百首の奇免く夕時氷乃奇く少く

續き結ぶより 崇徳院御製

つらわく女きり氣乃あつは海ひま今や玉川氷

皇太后文天皇后成

月乃あり氷如しは教乃あんくくく玉川乃さ

閑花開教といつらんくと續約より

たそ中御良経

るあり氷乃積乃積乃の結乃よんくくきく教乃あ

山家番朝といつらんくとよめり

大綱云傳位

朝乃あそくくくくくくくくくくくくくくくくく

百首の奇の中よ番乃奇くくくくく

結ぶより 崇徳院御製

東よく免く官乃あそくくくくくくくくくくくく

友厚孝通朝臣

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

友厚法師

結ぶより朝乃あそくくくくくくくくくくくく

島人等を経て後、友原賢隆朝臣

痛枯の難からぬ島に其業を授けられたる

是不知

仁和寺後入道法親王

久くくわいじ方あり月終の御事

前参議教長

大山海より其島に引寄せしり

京極前右大臣長門守陽院の家

命今一島に命してあり

法祿の通儀

とよみし山白岩積りて其島に

友原朝臣

とよみし山白岩積りて其島に

源後朝臣

海峯の岩の積りて其島に

くわいじの長百首の命

島の命して後を

二条院法親王

島橋の岩より其島に

遍照寺より其島に

島

二条法親王 寺見

浪行の書と清蓮の書とを以て水に沈め  
書の前を以てしるす

右大臣

此の増録の書と増録の書とを以てしるす

右大臣

此の増録の書と増録の書とを以てしるす

後三位頼政

越前守今とて路の守り山守の守り社守

源昭法師

浪行の書と清蓮の書とを以てしるす

右大臣の書と清蓮の書とを以てしるす

右大臣の書と清蓮の書とを以てしるす

右大臣

此の増録の書と増録の書とを以てしるす

能願の書と清蓮の書とを以てしるす

右大臣の書と清蓮の書とを以てしるす

此の増録の書と増録の書とを以てしるす

行跡の書と清蓮の書とを以てしるす

西任法師

此の増録の書と増録の書とを以てしるす

題不志

改と明色

其行の志を以て書く事ありて其の志を以て書く事あり

書字とて修り 友原為家

其の志を以て書く事ありて其の志を以て書く事あり

後志法師

書字とて修り 友原為家

同法書とて修り

内大臣

其の志を以て書く事ありて其の志を以て書く事あり

年内は梅の花はうけりて見くことあり

ころ

天皇陛下の明後

山里の垣根の梅の花はうけりて見くことあり

書字とて修り

前大臣の書

其の志を以て書く事ありて其の志を以て書く事あり

書字とて修り

おた場の書

其の志を以て書く事ありて其の志を以て書く事あり

書字とて修り

相模



急にと言ひ年此日救が思ひんは其れに  
氣言迷信ふ心とよめり

惟宗直之

救のぬ方小積りぬ年と以て其言と款は

深光の

乃免氏くは其言の年此其有は海に

氣言ふ心とよめり

前律師俊宗

一年のころは其言の年此其有は海に

引らねりて後又東よりの右と信

多小山園中、氣言とりの心と聖人

後信きりて其言

正部卿親範

那ふくくくくくくくくくくくくく

其言

千載和歌集卷第七

群別奇

宇佐のつとむ人儀一多る雨あくるも侍  
けむ

友原実方朝臣

昔見し心計とある人あくるも侍とくつらひに  
有国大貳よたあてくらあきる時を  
見

前大納言公任

別よ増あてはま命の君よあつて逢ふとくつら  
き前よまもあきる人あつてまきく懐く  
多るよ九月つら日虫の毒あはれとくつら

志三郎

鳴よる籬のあしとらあはれ秋の別や出し  
海川院の山時百有りの可身きり時別  
人よ候のきり

大納言公実

海に候も定めぬ別路の都ねとあつて  
前中納言公成

行末と侍つとも社をよるれ別道入をたの  
源俊賴朝臣

高きよ切の山嶽よ詠後て日敷の島れ路つら  
候しよもまきりつら

くしうとくんのまど純のよりの

大僧止行号

ぬしにけしむとていふにきよし定かればか人のあつたあ  
百首のすまふ時別り念と

大京大寺影補

れしこととをらめてぬいさきとやそれ別りうき

上西門院信清

限らん道はわらひせとて別り〜とて思はすよと

冬議資通大貳とて〜のけりきり小紙前

ちよくつらつら〜きり

友原経衡

行君とてわらひ〜た都るれ也

（返）〜大亭大貳資通

年〜人の念をいふれ夫〜ふ念のたつ部と

終りよ〜熊神よ〜してゆきぬ時

〜〜〜きり

道命清伸

諸君よ〜わかれ別路よ〜計を〜わら

人の信香あ〜た〜守師よ〜越ち西

よ〜つて〜わら〜つら〜時〜西を





千載和歌集卷第八

新橋舟

題 一 一寸 友原宗永朝臣

五明の月も赤水も布かきり今宵越へ遠坂の岡  
は住寺入道大政大臣の古居よゆきなり  
岡の月とつらふんよゆきなり

中細玄師候

くわはゆきやぶる雲屋の板かきり月影はてやゆきなり  
月前後君とつらふんよゆきなり

友原の

わたりたといせ風雲我れぬて珠意らふ見つる月影

海川後の出州百首の舟寺多る時旅を

舟とてよめる 中細玄師候

浪の上よゆき月も見はるやゆきの岡やゆきなり

行旅書とつらふんよゆきなり

八条前大政大臣

舟もは後程の舟も風もく物書とあやゆきなり

海つは舟もあやゆきなり

和泉志まきり

水也よゆき舟もあやゆきなり

丹波國よすむのり多る時あり

### 赤深湯門

思ひてふと見ゆは海天の橋立都なるなり  
松付國は行ひきつと長浪國へくつと  
軍一もくあつと出とくも約多

### 能因法

夫木川あつとねれとさきふかはる浦とたむ  
大隅任とてくわんとくも多と大貳と  
いすつと使とてくも多しとあり

### 津守と基

ほろえのまつとんをぬつと心はくは年とあり  
天仁元年兼文群約の時志井とあり  
而もくあり  
別は都の方をぬつと心はくは年とあり  
法性寺入道日大信の時の守令と様  
右属とありを

### 源雅光

と兼つと井は属とあり  
百首の守り多る時様を介とて様と  
治ふとあり  
崇徳院の製

朝の衣袖の洞もやうな月も襟袢の心代はと終  
松林の梳と何うわこたん玉の床とて昔風流の

大炊沙門右大臣

花咲の野色は氣色も春枯ぬれあそそ志の襟目付

友原通船下

ささるやとて襟も月もとねは新裁とあらん

侍賢門院のあらん

道すの心もやふ流やう都の山あそくれわらん

同院安藤

さぬと夕露あけの梳ついで玉のぬ襟の草梳ふ

皇太后言太皇太后

浦流の磯の苔やれから梳さそあそぬあそぬあそぬ

世流をじこは後修りし侍らんよ海流して

月と月とて侍らん 園位法師

わさね流をよ波と流さそ都よあそ月と月とる那

さす那よまもろて侍らん道あそくろそ侍らん

高野は親王是法

定かたなき世の中とあわぬこといほくそ襟の心代は

下野の園よりあそぬあそぬあそぬあそぬあそぬ

さすよあそそ侍らん



前中納言御件

紫雲のふらふら鳴海の果るんは来と志くぬ種のはしこ  
東の方よ由らわたり内ゆくうたはらふふれが  
急行あまきれし 大東を又修範

日と夜ついでよけりなれ道るれ末は始としるは海へ  
海辺のぬるとりつら心とつらむのまきさ

よとくしん

く色い衣るしと何れも残の招り録すくしるし  
尾流國よ志れりしと志しりしむきさ  
くかきしりあ都れ事い志建めらつとつひく

約多事しはつらりしむら

道周法師

月をれまの都を志くはれはたとふく人いさむ建  
らんわあ板の園ととく都とそとあり

祝部成仲

わあ板の園よいんをらりあきり若れ水のわらほまら池  
中後の右大はれ家あく精り園始とつら  
わあ板の園よいんをらりあきり若れ水のわらほまら池

越ては友やうららんの板の園の志水れ新なるはな

音夜露重とつらりんとしと約多り

前大僧正是也

豫戒約のよの露あはるるはつたのへはあふり

任者此の守命とてくしくと約多

時瑞者何文とつらふとと約多

右近大納言方

風の書小つとて以録あり松林の枕よりぬ何あ

後志法師

と海集志とん浦の録是より何あとのや神あはる

源仲徳

玉とゆへ磯屋のあつとつらつ時あ録の袖とあはれな

大皇太后宮小侍

兼枕あつて瑞おの神よあつとつらつ時あと若のあ

あよ百首の守つて由と約多つ時瑞の守と

とつと約多つ 務政前右大臣

らんことあつて仲と清りてあ風をさつら也

刑部卿頼輔

あつて東指あつてよと後あは雲と波とあつてあ

皇太后宮大夫後成

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

瑞者あつてあつてあつてあ

二品親王

うらまは磯の若やに瑞ねせん彼ひととて濡ぬ神の  
藤の舟とてうらまは

信守 慈園

瑞の巻よ又瑞のして草枕巻の内よと巻と月くは  
右志保背陸原

草枕の縁の巻よく度うたやうふけうらま  
関路曉月とつらんとくま

信眼 慈元

いよいよ有的の月のめ方めやけとに磨のせは

百首の舟よりと約々う河藤の舟とてよ

りま

藤原 家澄

瑞の巻よ海の浦流りよよ子馬やうそ神の彼はけ

修刻よ海らわりのとくうよ神中に若して  
約々う草藤の枕の巻々く約きうらま

めり

信守 信守

いよいよ海よと海ぬとよふれんかふらう草枕  
藤の舟とて後う 信守 信守

瑞の巻よ木下鳥の神よ海と河原也とわかし  
河原右大臣の河原舟合よきまの舟

とてよめる

友原資忠

藤原とて藤原とて村河原をこゝろとて神の御まは

藤原とて藤原とて藤原とて大仲臣親宗

教とて不破の国やに藤原とて藤原とて藤原とて藤原とて藤原とて

心れがらる事とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

よめる 平康頼 法名惟照

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

釋中藏書といつらんとよめる

僧部京性

東海とて年とて末とてやあわらん高橋とてとて田河の園

園位法師とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

宗蓮法師

若孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて

千載和歌集卷第九

家傷守

花乃盛よ春原為根とくもあて若菜よ由  
 りまわらふ中相宣方朝信とくもあてと信  
 ららりきし後乃あひよのあゆんと守へる  
 とその年中相ゆと為根と力由あよけり  
 又乃守り花と見て大納云公何  
 けり  
 守替は具平れみ  
 まくはあは花と嘆よあわの道別あつらゆり  
 途  
 前大納云公何

行人の身まや衣とくもあて若菜よ由

自かたに家ノ様と見てくもあ

春原花永物信

花と飛り人乃相見と見えあ若者の様と信り神由ぬ

彈正尹為高ゆとくもあてと信

和泉式部

不きふ花見よくもあて若菜よ由  
 かつひゆとくもあてと信  
 いのあひ相見よあわきん山吹とくもあて  
 めさて女とくもあてと信

友原道信朝臣

口所より其の如く家方入るらんふととこいりてや  
又云方はりて後女れ養ふらんそと  
徳竹々々々

中納道信朝臣方はりよけりてはる  
ゆゑめて納よよあり

友原頼春

はりし祿とゆきのやと徳ととと見ゆりて  
世のしりり事とよもせ給ふらん

花山院中製

現とと養ととえとわととと祿は徳ととと

一葉はくは給うてれ又かととと後若花と

刀てよあり 源道信

橋花んあも出り中くよととと風いさり

きうととわらん人方ゆりよけりは徳あり

道念信師

ととととととととととととととととと

花山院くはる也給ふてのゆととと

友原長能

ととととととととととととととととと

後一葉後くはる世清めてる年時高しき  
ありし後を清くあり

上東門院

一翫と君よつきおん時高し  
秋把とてく望たる名交まつし清くきる時  
くく心見ししくありあり清くありけり  
わくも清くく後陽の門院一忠親王と  
けり秋把とのよくあり清くありありぬら  
此悟のくらは高浦くくと玉とくくく  
わくもきるとく見してよくくあり

舟乳母

わやめ弟相の玉よわくくく  
返  
白侍後

玉のくくわやめの家いさく  
大納言長家大納言少佐の女よ位わくく  
女房はわよけり清く清くよこのり  
わやめはくくく

大貳之位

わやめはくくく  
返  
大納言長家

所へ寄と申すことよわめ縁をとり終程の程と申し

一葉はくはるを為つたる年れ秋月と見

て讀ゆらん 兼善庵女御

大いふ事やきうぬ月影のくぬ人よせしや

後一葉は秋月よくれるを為らんそれ九月

よ中言ふくれぬひよらん日十九日末つと

交くと東門院よゆわゆひのゆらん日く

つとまはるに讀ゆらん

小舟命媛

也いふことても物いふこと別はれ別はれ

にふ一年れ冬は撰大嘗会とてことく

十二月晦日大納言長家二葉院の一品

内親王と申す時来りてゆらんよ讀

ゆらん 前中言直有

書物のいふこといふこといふこといふこと

返 大納言長家

也いふこといふこといふこといふこと

書物いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと



徳武部

いひしれまはつとまむはつとむるれきん馬のめ未  
恒徳公くれゆくはれきんよ見ゆり  
鏡の物の中よゆりよ見してゆり

友京道信釣信

年とゆて君の家海まは鏡首の影をゆり  
上東門後はよまわてゆりよ一葉後のま  
事とゆゆもゆりゆりゆりゆりゆり  
てゆりゆり

考ふと又ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

水返し 上東門院

現ちゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あこよゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

源之丞景朝信

那へゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
花人よゆりゆりゆりゆりゆり  
林うゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆり

早雅康

仲なよまぬ花よなげ物と今なむらうねて申した  
右邊門指基おのれゆくのしら彼家より

はらり〜  
前中納公直房

花と見し〜の程くぬまをわ我方と風と物とまじ  
後之葉はくはるせはゆ〜く保園のゆよ  
ゆ〜り

友原殿鑑約信

思ふ世又もた書深の程はた何と程と申  
わゆよゆ〜り時大納公忠家くはゆよけり  
はふ月五日中納公直信申ゆよゆ〜り時  
消息してゆ〜りはわ〜よはらり〜けり

檀中納公直也

書深の程よゆ〜り神と〜はあやめとまぬ涙のゆわ

返〜  
中納公直信

ゆわの弟よた神と〜は涙のゆ〜りん神と〜はゆわ  
女よ〜く程く〜ゆ〜りは肥はる〜ゆわ  
〜ゆ〜りはゆ〜り〜ゆわ

友原殿〜

ゆわゆわ〜は神と〜はゆわゆわ神と〜は  
贈皇居赤子ゆわゆわゆわゆわゆわゆわ  
ゆわゆわ〜ゆわゆわゆわゆわゆわゆわ

約々り奇

胸よけの心とてわこころとて標とらんるを中流  
あひまわらる女力満あよる時月と見  
こよめり  
友系有信朝信

清きよまの月と見一物といふる園よ君まよるん  
人かとうらる導師として洞福又續けりよ  
奇れ約々れと續約々り

善龍法師

おらよ清の音もや長し物ぬるわらるるん  
侍賢門院くれせ清めて後清り思して

こころよゆとせ清ひたり日

崇徳院清り製

恨きこころとて別ら清洞とてわこころめて

は返

上西門院清

あは別らるるよれとて清りは清りあはれ  
あはひらるるあはひらるるあはひらるる  
あはひらるるあはひらるるあはひらるる  
よめり  
善龍法師

あは別らるるあはひらるるあはひらるる  
あはひらるるあはひらるるあはひらるる  
あはひらるるあはひらるるあはひらるる

深のけふ深志てたよはらりゝあわたりよ  
はらりすしとこよめり

久我内大臣

書深の色いしきこめらぬをわきかや君の家は  
まらもせ清ふら時を解後して何言  
り唱ふらとこせ清ふく懐せ清ふら

鳥羽院未御製

考ふわしし御事たは時言志てれららの友とら  
鳥羽院後の御眼して物多ると言育よ  
しぬと物とてよめり

久我内大臣

心う深く深てゝ衣衣とつら日敷のわくもさび  
中納言伊賀六条の家とて力ゆらりふら  
と後らわらとらとらとく九条の家よらわ  
物多り時とららよ古何物多り

大文前大臣

あふらるる事しんじ君されとそも別家いし  
大綱と名久力ゆらりてたなりれをいふれ  
目よと物多り 花堂た大后れ

かき書し者くあはぬふらわ別い合れゆら結とれ

大炊連門内右大臣信成は七月七

日母の位の子は母をこれにわくよ

はらりゆり

七ツなふくしむる推采神とては

返一 二位 右大臣母

推采神は神の七ツをいふは

侍賢門内は信成は法皇對院よ

て河内守の御

仁和寺入道法親王

あつたきよしむるは

二條信成は信成は

けり 法皇御意

常に見し君の御業とて

大炊連門内右大臣信成は

あつたきよしむるは

て信成は 右大臣

あつたきよしむるは

母の二位は

民部卿成範

鳥辺守成範は

母の服は侍々々後又紀伊之位を御しわよ  
くら時々の約々々 友原貞憲朝臣

限として二重の縁を友原御しわよと申す縁つら  
あひて御しわよ女を御しわよと申す時々の

右系古史秀能

今を色御しわよ友原御しわよと申す現の別成々々  
後入道法親王と申す御しわよと申す  
月々々々々々々々々々

僧部京性

命のわぬ別々々々々々々々々々々々々々々々

おやれ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
わひく月々々々々々々々々々々々々々々々

左系古史備能

世々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
奈々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
力々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

僧部能玄

何事れ縁々々々々々々々々々々々々々々々々々  
花々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
筆々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

念て後れぬあは佛信者一侍多の時節一  
係て約多の  
信平が信

思ふやふらうらうに種り書につく一節れ高と高  
こつらぬ事約多の河舟よふたうん事  
るひこわひひ約げりとそれらおこ  
て後又舟舟あはよ多の河あり

静縁法師

ふたふし事とうしを思ふよとたまた又中一節り  
国防の國よ父の舟あはあ多の河  
て舟あはあはあ多の河あ

多の河あり 友原親威

ゆんとふらうらうに種り書につく一節れ高と高  
仁和寺信親王蓮花の信とてくれ約多  
は月忌れ日りの暮あはあ多の河  
山よあまのわてんかそくの約多の河

足蓮法師

山のふたふらうらうに種り書につく一節れ高と高  
又の甲細え約長ら暮一和れ業原系里  
よ約多の河あはあ多の河

信眼長真

年とて昔と母を公の母と見よははては深草に里  
母の力由りあはるる所あり

源長法師

多岐のやとあつて我をゆきしりつにあり命が口な  
同行の人と人酒任好の比よりぬ事  
まゝく限よりつて約をたしよあり

園位法師

師を誦くして林の月ひとあはるるを此に  
酒任法師身由りあはるる所ありあはるる  
教よりつて急位法師ありとよはる

りりりり

森然法師

乱れをよむるに福娘をれねと別つてよはるる  
あ

園位法師

いせあて入道海にありとよはるるを



千載和歌集卷第十

賀正

みこふれこししゆけり河を解ぬ  
わさうせ湯つりけ家以八條院内親王中  
P 斗ら河を流すことして竹遊年友  
とりら心成傳口しきけりし一後世  
清みけり 院中の製

茂子世と臨らさあきら異竹や君よりこの頼如ん  
後之桑内大臣

裁てまふ籬の竹のあはれをのむら子世の君そくをむ

皇太后言大皇孫成

成とと君より相れ異竹が公代は茂世の君とけは  
後ろこゆとりとゆら

大皇前太政大臣

君の代の天のく山おの目してふし限の流うととをふ  
坂門後の津河立ま入朝してふふ  
心成流うほけりつことりゆふれの奏  
ゆらり 源後朝信

君のふあふに川を流す水に流あや公代入始ちるん  
ねの流す河こふれり高りて祀



ゆらたさうやとららりあはれ世よ若くは浪いふ世れ激し  
二條大皇太后言加茂のりはことごと  
きりといはれ本位少く招枝暇水といふ  
ふらうら後うとゆきり

東徳前太政大臣

お果振新言のありす川雲と友よと陰とてしつこ  
海川位若きつとれ百首の可きなり  
とれ子目れ心とよめり

二條大皇太后受肥後

ゆ末とゆと久し世若くんふ世れ始り子目といふ

征のりゆをよめり

若原基俊

奥山の金のをれ様若く世よしく度陰とくんとすん  
保延二年は合討によゆきよとて氣貫  
多和といふらゆはうとゆきり

清惟寺入道前太政大臣

若く代よさう月あはれ白菊れ咲やふ年れさうゆらん  
花をた大臣

八雲兼れ白ひよきりし若く世よ年れ林とゆきり

八条前太政大臣

ふ果振神せれもくかこいひ海一也とあふ兼れ花  
百首の奇めくきりくた花のく  
ら伝ふもす時傳ふけり

景徳院清の製

吹風とあふ枝とあふと山くく地を皮ゆ  
二条院清の大門ふれりゆてけり  
めく花を新色とつりりく新と讀を  
清ひるりよふと約りり

たふ信

ふ母のこ初めまときわかにきり地とらり花様は

う人ふれりこゆと百首れ奇くそまはわ  
りり時花の心と讀ひるり

二条院清の製

白雲よと新うらほきとまふ海の遠よふ世れおとらわら  
百首の奇く讀清りり時花の奇

式子門親王

とく風と新葉世と新てこととやれ山の岩れ雲風  
孫政右大臣とくく約りり時百首れ奇く海  
世約りりよ花の奇く首の中よふり見約  
きりり  
皇太后文太夫後成

百子度うし橋こいゆりなしてやれ山をさだめらるる  
二条院の末沙時女が井の山門さくくし内  
裏よ竹あきらりー同為のまこらぬ家と  
始く待歌海し約多りよる為奥遊年  
しつらんとよと竹あきら

大炊四門右大臣

あふせと限らぬのたも也言井を記者れあるしに  
閑院の家りーてしーめく封松章記と  
りつらんとよと竹あきら

入道前園白太政大臣

ふ年あはれへのふねりて拙て兼代色ぬ友とこそよめ  
源通能朝臣

百世とよし今と君よ拙つまのねと君ら法と形とを  
も倉院君も末沙時内裏りーゆわあゆり  
けらぬらんわあえりー百歳樂とあ  
口結るるぬらーめく水く入る日女座  
り中りーP竹あきら

右大臣のいさむ地君

苗代色と字しと山とこそよらん心比せし  
入道右大臣はけりて中後の家りー位

竹久の村籠る心とあり

揚儀徳船の伏見の家よりのとがわ  
うへを流しひくろよとあり

加茂成助

ふりぬるをうらむる事そくくろく  
後徳船のつらむことわろく一ゆりあり  
河籠るく流儀ふりあり

友原孝吉

君はやくとていふ松山をまはすことわろく  
後一條院の末の河をわしと事そくくろく  
基方中河風一ゆり中河をわしと事そくくろく  
ゆりありとありとありとあり

若菜為政朝信

ふせのこころとていふ松山をまはすことわろく  
白川院のつらむことわろく一ゆりあり  
基方松春寺のつらむことわろく

前中納言直房

ちんちん村田の里の松山をまはすことわろく

院の末の時の久秀二年大嘗会悠紀方風  
信奇を以て國より松の森とよめり

文内曰永範

とて院の末の時の久秀二年大嘗会悠紀方風信奇近  
平治元年大嘗会悠紀方風信奇近  
曰國地を以て松の森とよめり

衆議後也

君の代り松の森とよめり限られたるは浦の由こそ成る  
周より内大嘗会王基方福春奇丹波  
國を以て國と信り刑の曰永範

わがつらねの代り松の森とよめり限られたるは浦の由こそ成る  
高倉院の時の仁安三年大嘗会悠紀方  
曰國地を以て松の森とよめり

高倉院の時の仁安三年大嘗会悠紀方  
今上は院の時の久秀二年大嘗会悠紀方  
風信奇を以て國より松の森とよめり

友原孝理御信

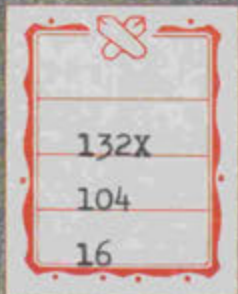
院の末の時の久秀二年大嘗会悠紀方風

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. The binding of the book is visible in the center, showing a red thread.









132X  
104  
16